

教育・実務業績書（専門職大学等の教員）

平成29年11月15日

氏名 高柳 信子

職 業 分 野	職 務 内 容 の キ ー ワ ー ド	
獣医学	外科、腫瘍外科治療、眼科	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
①ヤマザキ動物専門学校における教育実績	平成18年4月～ （現在に至る）	ヤマザキ動物専門学校動物看護・美容学科および動物看護学科における「生理学」、「臨床病理学」、「小動物繁殖生理学」（3科目）の科目について、基礎知識の習得、実際の症例を挙げて、解説するなどし、全般的な理解をさせるために教育効果があった。
②アニマル・メディカル・センターにおける教育実績	平成25年4月～ （現在に至る）	ヤマザキ学園大学学生およびヤマザキ動物専門学校学生の動物病院実習において、次の事項を解説・指導をしている。 「動物病院の業務について」 ・動物病院における1日の流れの解説・指導（電話対応・カルテ整理等） ・動物病院における設備点検、清掃および消毒等の解説・指導 ・獣医師の指導による入院診療の補佐の解説・指導（点滴管理・投薬補助等） ・入院犬の飼養に関する解説・指導  「診療機器の操作・管理について」 ・診療用機器備品の点検・管理の解説・指導 ・外科用麻酔機器および滅菌機器等の解説・指導  「診療行為の学術的説明について」 ・診療および診療内容の学術的解説 特に、レントゲンおよびエコーの診断解説 ・細胞診検査および顕微鏡による細胞診診断の解説・指導 ・模型を使用して、運動機能の疾患に関する形態機能学的の解説・指導 ・レントゲン撮影補助・現像等の解説・指導  「学生評価」 ・動物病院実習における学生の評価を行い、坦任にフィードバックしている。
③ヤマザキ学園大学における教育実績	平成25年12月～ （現在に至る）	ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科における「解剖・生理学実習」および「生理学実習」を担当している。 生理学を中心とした基礎知識の習得、それらの知識をもとにした生理学についての理論と実習を

		行うことにより、生理学についての全般的な理解をさせるために教育効果があった。また、実験手技について考えさせることができた。
2 作成した教科書、教材 なし		
3 教育上の能力に関する大学等の評価 ・ヤマザキ学園大学における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 1 月	「解剖生理学実習」の授業評価アンケートにおいて、授業が分かりやすく面白いなど、すべての項目について平均点を上回る評価を得た。学生が新たな発見ができるよう、授業を充実させた結果であると思われる。
4 その他 なし		
実 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 資格、免許 ・獣医師免許 ・日本獣医がん学会 獣医腫瘍科 認定医Ⅱ種		
2 職務の経歴及び職務上の業績 ①工藤動物病院での実務	平成 11 年 4 月～ 平成 13 年 3 月	<p>工藤動物病院において、2年間、一般診療、外科診療に携わる。また、眼科専門病院として、眼科診療および眼科手術（マイクロサージャリー）に携わる。</p> <p>「一般診療部門」 予防医療（健康診断、予防接種、マイクロチップの埋め込み等）、一般診療（消化器、循環器、呼吸器、皮膚、神経、運動器、歯科等）の診察および診療に携わる。</p> <p>「外科診療部門」 手術の助手および麻酔補助として携わる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・整形外科 前十字靭帯断裂によるオーバーザトップ法、骨折整復術等の診察および診療に携わる。</li> <li>・形成外科 断耳術、断尾術、断指術、眼瞼形成術等の診察および診療に携わる。</li> <li>・泌尿器外科 膀胱切開及び膀胱結石除去、尿道閉塞における会陰尿道瘻造設術、会陰ヘルニア整復術、膀胱憩室切除術等の診察および診療に携わる。</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・生殖器外科 去勢・避妊手術、子宮蓄膿症および子宮内膜過形成症、卵巣嚢腫による子宮卵巣全摘出術、難産による帝王切開等の診察および診療に携わる。</li> <li>・腫瘍外科 皮膚腫瘍摘出術、乳腺腫瘍部分摘出術等の診察および診療に携わる。</li> <li>・消化器外科 胃切開による異物摘出などの診察および診療に携わる。</li> <li>・口腔外科 猫の難治性口内炎歯肉炎における全抜歯、犬猫の歯肉および口腔内腫瘍切除生検等の診察および診療に携わる。</li> </ul> <p>「眼科外科部門」</p> <p>各外科適応の眼科疾患における、顕微鏡下でのマイクロサージャリーの助手、麻酔、補助に携わる。また、術前の眼科検査と術後の入院処置（眼科処置、内科処置）、眼科検査を担当する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・白内障手術 犬の角膜切開による水晶体囊外摘出術、水晶体超音波乳化吸引術および眼内レンズ挿入術等の診察および診療に携わる。</li> <li>・緑内障 毛様体ジアテルミー、犬の眼内シリコン義眼挿入術、犬の眼球摘出術、眼球内ゲンタマイシン注入による眼球萎縮形成等の診察および診療に携わる。</li> <li>・角膜疾患 猫の角膜分離症における保存角膜を使用した角膜移植術、角膜穿孔症例の結膜または瞬フラップ、角膜多点状切開等の診察および診療に携わる。</li> <li>・眼瞼疾患 眼瞼内反および外反症の犬の眼瞼形成術、猫の眼瞼欠損症における眼瞼整復術、子犬子猫の先天性眼瞼癒着整復術、マイボーム腺腫切除術、異所性睫毛および睫毛重生、睫毛乱生におけるクライオサージャリー施術、難治性流涙症における涙管ブジーを用いた涙管拡張術等の診察および診療に携わる。</li> </ul> <p>「眼科内科部門」</p> <p>以下の特異な眼科疾患において、内科的治療（点眼薬などの外用薬も含む）に携わる。</p>
--	--	--

<p>②アルファ動物病院での実務</p>	<p>平成 13 年 7 月～ 平成 29 年 3 月</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋田犬のブドウ膜皮膚症候群（フォークト小柳一原田病）に対する、免疫抑制剤、ステロイドなどによる治療に携わる。</li> <li>・難治性乾性角結膜炎に対する、免疫抑制剤などによる治療に携わる。</li> <li>・ジャーマンシェパードの表在性角結膜炎（ジャーマンシェパードパンヌス）に対する、免疫抑制剤、ステロイドなどによる治療に携わる。</li> <li>・ペルシャ猫の角膜分離症（角膜黒色壊死症）に対する、抗ウイルス薬などによる治療に携わる。</li> </ul> <p>／難治性角膜潰瘍またはデスメ膜瘤症例の治療用コンタクトレンズの装着及び血清点眼での治療に携わる。</p> <p>アルファ病院において、一般診療、内科診療、および外科診療（手術を執刀）に携わる。また、同期間に麻布大学専科研修医（腫瘍科）に所属し、獣医腫瘍科認定医の資格を得て、腫瘍症例の診療に携わる。</p> <p>「一般診療部門」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・予防接種、マイクロチップの埋め込み、健康診断セット、心臓検診セットなど、予防獣医療に特化した検査及び診断を担当した。</li> </ul> <p>「内科診療部門」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・犬の免疫介在性溶血性貧血（数例）を高用量ステロイド、免疫抑制剤、人グロブリン製剤のコンビネーションによる治療に携わる。</li> <li>・犬の免疫介在性血小板減少症（数例）、高用量ステロイド、免疫抑制剤製剤のコンビネーションによる治療に携わる。</li> <li>・犬、猫の免疫介在性多発性関節炎（数例）を非ステロイド系消炎鎮痛剤（NSAIDs）、ステロイド、免疫抑制剤のコンビネーションによる治療に携わる。</li> <li>・犬蛋白漏出性腎症およびネフローゼ症候群（2例）を ACE 阻害剤、低用量アスピリン等による治療に携わる。</li> <li>・犬僧帽弁閉鎖不全症（年間数十例）を定期的心臓検診と内科的治療による長期コントロールに携わる。</li> <li>・猫の肥大型心筋症（年間数例）において、動脈塞栓症を起こし下半身不全麻痺を呈した症例に対し、定期的心臓検診と内科的治療により、麻痺の改善および良好な QOL を維持可能とした。</li> </ul>
----------------------	-------------------------------------	--

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・犬シタンポナーゼ（数例）において、内科的治療により、良好な QOL を維持可能とした。</li> <li>・犬の難治性表在性角結膜炎において、ステロイド製剤点眼薬、免疫抑制点眼剤などの外用のみで、長期良好な QOL を維持可能とした。</li> <li>・犬猫の難治性アレルギー性皮膚炎、犬の難治性脂漏性皮膚炎において、シャンプー療法、ステロイド製剤、抗ヒスタミン製剤、食事療法、オクラシチニブマレイン酸塩製剤による、長期良好な QOL を維持可能とした。</li> <li>・猫の好酸球性肉芽腫症において、皮膚のパンチ生検にて診断、およびステロイド剤などによる長期良好な QOL を維持可能とした。</li> <li>・犬猫の急性膀胱炎において、内科的治療により、ほぼ完治させた。</li> <li>・犬の僧房弁閉鎖不全症と難治性気管支肺炎の併発症例において、積極的なネブライザー治療と心臓病治療薬による内科的治療において、良好な QOL を維持可能とした。</li> <li>・犬猫の糖尿病およびケトosisにおいて、定期的血液検査及び血統曲線のモニタリングにより、インスリン投与を行い、長期コントロールを可能とした。</li> <li>・犬猫のてんかん症例において、定期的な薬物血中濃度の測定を行い、内科的治療で長期コントロールを可能とした</li> <li>・犬の副腎皮質機能亢進症（クッシング症候群）において、ACTH 刺激試験および副腎のエコー検査により確定診断を行い、トリロスタンによる内科治療によって、良好な QOL を得ることを可能とした。</li> <li>・猫の慢性腎臓病（年に数十数例）において、点滴や内科治療により進行ステージ（ステージ 4）からのダウンステージ、および良好な QOL を維持しつつ、延命を可能とした。</li> <li>・高齢猫の甲状腺機能亢進症に対し、定期的な甲状腺ホルモン測定によるチアマゾール投与のコントロールを行い、QOL の向上とその維持を可能とした。</li> </ul> <p>「一般外科部門」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・犬の子宮蓄膿症からの子宮破裂による化膿性腹膜炎症例において、子宮卵巣全摘出後、腹腔内洗浄を行い、抗生剤による術後管理によって、完治させた。</li> </ul>
--	--	---

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・犬の子宮内膜・子宮蓄膿症候群（年間数例）において、子宮卵巣全摘出術を行い、完治させた。</li> <li>・犬猫の潜在精巣症例において、外科的治療により完治させた。</li> <li>・巨大な臍ヘルニアから脱出した脂肪組織が壊死した犬の症例において、壊死組織の切除及びヘルニア輪の整復術を行い完治させた。</li> <li>・犬猫の膀胱結石、尿道結石症例において、膀胱切開術による外科治療により完治させた。</li> <li>・猫の膀胱過形成による腫瘤病変の症例において、外科的切除により完治させた。</li> <li>・犬の歯根端膿瘍における眼下皮膚の自潰に対し、抜歯および歯槽骨の搔爬、歯肉フラップ形成により完治させた。</li> </ul> <p>「腫瘍部門」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・犬猫の多発性進行性乳腺癌において、乳腺片側全摘出術を実施後、補助的化学療法（プラチナ製剤）投与を行い、犬では完治させ、猫では長期間の QOL の維持を可能とした</li> <li>・猫の広範囲扁平上皮癌において、下顎 2/3 広範囲部分顎骨切除術および食道婁チューブ設置により、再発転移なく良好なコントロールを可能とした。</li> <li>・犬の肥満細胞腫（数十例）に対し、広範囲切除術および、術後抗がん剤、プレドニゾロン（ステロイド）などの補助的化学治療を行い、パトニック分類Ⅱの症例は完治させ、パトニック分類Ⅲの症例は長期再発転移を認めず良好にコントロールを可能とした</li> <li>・猫の多発性皮膚肥満細胞腫において（数十例）に対し、パンチ生検または切除生検を行ったあと、ステロイドまたは抗がん剤によって、完全寛解を得ることを可能とした。</li> <li>・小型犬の進行性増大傾向を示す膝関節付近の巨大脂肪腫に対し、外科切除を実施し完治させた。</li> <li>・犬の重複癌症例（皮膚の線維肉腫、肢端の肥満細胞腫、皮膚の脂肪肉腫、眼のメラノーマ）において、切除生検を兼ねた緩和的外科手術を行い、術後抗がん剤治療を行うことで、再発の抑制と良好な QOL を可能とした。</li> <li>・犬の巨大な皮膚の軟部組織肉腫に対し、皮膚広範囲緩和的切除術を実施後、長期間再発を抑制し良好なコントロールを可能とした。</li> </ul>
--	--	--

<p>③DVD の制作</p>	<p>平成 16 年 4 月 (第 1 版)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・犬の肛門周囲腺上皮腫に対し、外科切除を実施し完治させた。</li> <li>・犬の肛門周囲腺上皮腫に対し、外科切除を実施し完治させた。</li> <li>・犬の頭部の悪性神経鞘腫に対し、外科切除を実施し完治させた。</li> <li>・犬の広範囲の毛包過誤腫、膠原繊維過誤腫において、皮膚の広範囲の外科切除を実施し完治させた。</li> <li>・犬猫の悪性リンパ腫症例（数十例）、多発性骨髄腫、白血病症例において、他剤併用プロトコルによる抗がん剤治療により良好な QOL の向上及び延命を可能とした。</li> <li>・猫の鼻腺癌において分子標的薬による緩和治療により腫瘍の縮小と QOL の向上を可能とした。</li> </ul> <p>小動物腫瘍外科 1 腫瘍外科の基本・生検手技と体表部腫瘍外科(ファームプレス) 専科研修医として DVD 作成に携わる。</p>
<p>3 当該分野の実務業績に対する 産業界等の評価</p> <p>なし</p>		
<p>4 その他</p> <p>なし</p>		

研究業績等に関する事項		
事項	年月日	概要
<p>1 著書、論文、その他の成果発表</p> <p>(著書) なし</p> <p>(学術論文) なし</p> <p>(学会発表)</p> <p>1 「浅頸リンパ節に転移が認められた指間の皮脂腺上皮腫の犬の1例」発表</p> <p>2 「多中心型リンパ腫 (Stage IV a) と甲状腺癌 (Stage II) を併発し1年4ヵ月生存した犬の1例」発表</p> <p>3 外科治療または放射線治療を行った犬の胸腺腫の15例の分析」発表</p>	<p>平成15年9月 (ホテルニューオオタニ)</p> <p>平成16年9月 (ホテルニューオオタニ)</p> <p>平成17年1月 (大阪国際会議場(グランキューブ大阪))</p>	<p>日本獣医臨床フォーラム 病理では良性とされる指間の皮脂腺上皮腫が浅頸リンパ節に転移が認められたシーザー犬の一例報告。低悪性度の挙動をとったため、断脚とリンパ節廓清を行い、予後は良好であった。</p> <p>日本獣医臨床フォーラム 多中心型リンパ腫 (Stage IV a) と甲状腺癌 (Stage II) を併発したビーグル犬の重複がん症例の一例報告の発表。抗がん剤治療を優先させながら、甲状腺癌切除を行い、良好なコントロールを得、1年4か月間の生存期間を得られた。</p> <p>第26回動物臨床医学会年次大会 犬15例のさまざまな大きさの胸腺腫を回顧的に分析。レントゲン画像で、外科治療、放射線治療の選択基準を検討するために、独自にスコアリングシステムを作成し考察した。</p>
<p>2 特許等 なし</p>		
<p>3 その他 なし</p>		